

琉球大学学術リポジトリ

イヴァン・リュミンに描写されたウスマイ人が住む
島：奄美大島の1771年の東欧人寄港事件

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2018-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: グレジユク, シモン, Gredżuk, Szymon メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42367

【研究論文】

イヴァン・リュミンに描写されたウスマイ人が住む島
—奄美大島の1771年の東欧人寄港事件—

シモン・グレジユク*

The Island Where Usmayans Live, as Described by Ivan Ryumin:
Arrival of the Eastern Europeans on Amami Ōshima (1771)

Szymon GREDŹUK

要旨

本論文は1771年の夏に奄美大島へ東欧人が寄港した事件について、ロシア語資料を日本語に翻訳し、日本語文献資料との比較をしながら当時の状況について考察するものである。本事件については、『大島代官記』と指導者ベニョフスキ伯爵の『回想記』に参照されているが、同行者のイヴァン・リュミンの資料は未だ検討されていない。本論では、リュミンの記録にある奄美大島に関する一章を日本語に抄訳し、日本の現地史料およびベニョフスキの記述と比較しながら本事件について考察する。リュミンの記録は単純な叙述だが、奄美大島の伊須集落の民族誌的記述および環境の詳細かつ正確な観察を含む。それゆえ、『回想記』の補足的資料としてだけでなく、近世奄美に関する独自の記述としても再検討すべきである。

Abstract

This paper is an investigation into an event of Eastern Europeans' arrival on Amami Ōshima Island in the summer of 1771. This unexpected incident, which can be found in Satsuma governor's record - *Ōshima daikanki*, is usually compared with the infamous account of the group leader - Count Benyowsky's *Memoirs and Travels*. However, the account of his fellow escapee - Ivan Ryumin has not yet been well considered. Therefore, this is the first Japanese translation of the part concerning Amami Ōshima, followed by its analysis and brief comparison with the Japanese sources and Benyowsky's account. Ryumin's report appears to be very straightforward narrative, and yet detailed and accurate ethnographical and environmental observations are made on Isu in Amami Ōshima. Hence the present material needs our reconsideration as original foreign account on the early modern Amami, not just as a cross-reference for the *Memoirs and Travels*.

*琉球大学大学院人文社会科学研究科博士課程後期
Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus.

はじめに

奄美大島の近世期を考えてみれば、琉球王国の版図として 1609 年の薩摩侵攻により薩摩藩の直接管理に置かれたため、その政治状況は琉球王国の影響下から薩摩の影響下への過渡期にあったと思われる。その最中の 18 世紀の状況を伝える史料は、薩摩藩の大島代官の記録以外は非常に少なく、特に奉行から離れた南方地域の情報はわずかである。同時に、17 世紀の前半から幕府は異国との外交を制限したため、異国船の来航は激しく減少した。1615 年に三浦按針が奄美大島の名瀬港に来航してから、以後 150 年以上の間に、奄美および琉球に関する情報はヨーロッパで見られなかった¹⁾。

上述した『大島代官記』、つまり 1610-1858 年の間に作成されていた奄美大島の薩摩代官の記録の内容は、主に役所の業務および役人の変更であるが、明和 8 年 (1771) に「阿蘭陀船の漂着事件」という意外な記述がある。「6 月中旬 (旧暦) に到来者が伊須村の砂浜に上陸し、テントを張った。皆が武装していたし、大砲も設置したため、村中に混乱を起こした。20 日に薩摩役人の皆が現場に到着し、村の警護を定め、万が一の対戦に備えていたが、そんなことはなく、7 月 1 日に異国船は追い風で出航した」というものである。(口語抄訳：本論文の著者)

以上の不意の到来者は、実際にカムチャツカの収容所から乗っ取った船舶で出航したロシア人の囚人、東欧の捕虜、カムチャツカの住民などの脱走者だった。その団体を指導したのは、マウリティウス・ベニョフスキ (洗礼の氏名：Mauritius Benyovszky) という興味深い人物であった。彼は 1769 年にロシア軍に対する戦で怪我を負い、捕虜としてカムチャツカのボルシェレツク収容所へ送られた。そこでうまく陰謀を企て、脱走やマカオへの航海に成功した。ベニョフスキはその途中、偶然に訪問した日本およびその周辺の地域の経験と感想をその内容をかなり粉飾したり、誇張したりしながら『回想記』²⁾ に描写した。当時のヨーロッパで、日本または琉球に関する情報は稀だったため、著者の没後に出版された『回想記』は、その信憑性にもかかわらず大人気を博した。

ベニョフスキの航海は他の探検航海と同じように、1 人の成果として考えられる傾向が強い。しかし、ベニョフスキとともにおよそ 60~70 人が脱走し、その船員の努力は同じく重要で、その人物達の残した資料も検討すべきである。大勢の同行者は読み書きのできないボルシェレツクの住民だったが、その内に役人、軍人、貴族もいた。それぞれの視点を読むことができれば、航海の謎めいた点を明らかにする可能性があるのかもしれない。ベニョフスキの『回想記』ほどは普及された記述はないものの、2 人のロシア人の同行者が残した資料も確認されている。

まず、イッポリトゥ・ステパノフ (Ипполит Степанов) の日記があるが、奄美大島については、7 月 19 日-8 月 1 日 (ユリウス歴) の間に北緯 28 度にあるウスマス島に錨泊したという簡潔で、驚くほど正確な情報しか述べられていない³⁾。もう一つは、この論文の研究対象であるリュミンの記録という資料である。その中にリュミンはステパノフとほぼ同じ日付で「ウスマイ人⁴⁾ が住む島」の到来を記述する。ステパノフの「ウスマス島」、リュミンの「ウスマイツィ」、ベニョフスキの「ウスマイ・リゴン」、それぞれの単語は「ウスマ」という部分があり、現地の発音から記された「大島」の意味を指すと思われる。

この論文の目的は、まずリュミンの記録を紹介することである。この資料は前に、いくつかベニョフスキに関する研究で参照されたことはあるが、個別に十分分析されてはいな

いし、日本側の史料と比較されたこともない。重要な『回想記』の比較資料であるが、上述したように、ずっとその陰に隠れていたこの記述は同様に重要な内容を含んでいると考えられる。それゆえ、奄美大島を描写する部分を始めて日本語に抄訳し、この記録を通して1771年の漂着事件および近世奄美の事情を検討する。さらに、未だに取り上げられていない東欧人のリュミンを、18世紀の近世の日本および琉球に到来した異国人として再検討する。

リュミンの記録

イヴァン・リュミン (Иван Рюмин) は、カムチャツカのボルシェレツク収容所の事務員として勤め、事務の資料や地図が手に入れることができたので、反乱に必要な役割を果たせたと思われる。リュミンの脱走の動機は明らかではないが、1766年の捜査中にフォックス諸島の秘密の探検を隠した疑いで罰せられ、降格されたことから、地方政権に対して恨みを抱いていたため、反乱に参加した可能性がある。脱走者の船内でも秘書を務め、その航海日誌の作成に手を加えたと思われる。リュミンは、妻とともに、フランスまでベニョフスキとの旅を耐えた⁵⁾。到着した1772年に、パリのロシア大使にロシアへ送還された。その際に作成された報告書には、3人の脱走者(リュミン、スデイキン、ポチャロフ)の観察も含まれたが、後世にリュミン記録として知られるようになった⁶⁾。本人はその後、トボルスクの役人として人生を送った⁷⁾。

リュミンの記録は、1822年に初めてサンクトペテルブルクのジャーナルにて公表された⁸⁾。有名な歴史家ヴァシリー・ベルフ (Василий Николаевич Берх) により、シベリア旅行中に発見された原本である。1821年の論文にてベニョフスキの回想記を批判したこの研究者は、リュミンの記録は単純かつ誠実であるから、粉飾された『回想記』より信憑性が高いと評価した。リュミンのスタイルと内容を保存するため、その記述は全く編集されおらず、文字通りに写本したと述べられている⁹⁾。

本論文の著者もリュミンの記録を翻訳する時に、表現の特徴性と同時に言葉の意味を保つ工夫を試みた。第4章はウスマイ人が住む島の滞在を描写している。この一章を抄訳し、以下に示す。

『ベニョフスキとの冒険に関するリュミン事務員の記録』

4章

聖ペテロのガリオット船の日本の湾よりバシー群島¹⁰⁾ という
ウスマイ人が住む島々への通航およびそこで生活と出航について。

7月12日に日本の湾を出港してから12、13日も航海していた。14日に我が船の前にブス¹¹⁾ という大きな和船が帆走するのが見られた。いくらか時間をかけて我々から引き離しており、結局見えなくなった。15、16、17、18日に海上で何も見えなかった。7月19日に右方に陸を見つけた。非常に高い山や岩に囲まれたやや大きな島だった。左にも大きくない島が見えた。夜中にその大きい島に近づいたが、(何ヶ所で一晩中焚き火が見えた) 遅かったため、沖に出て、翌日の朝、つまり20日にさらに近寄った。魅力的な湾を見つけ、無事に入った。帆を巻き上げ、錨を下ろすと、海岸からボートが近寄ってきた。島の住民、

いわゆるウスマイ人が船上に粟や芋やいくつか新鮮な海の魚を持って来た。彼らも船上で適正にもてなされた。

同20日に指導者のベイスポスク¹²⁾はヨール船を降ろし、数人を陸に送り、テントを張ること、およびパンを焼くことに適切な場所を見つけるように指令した。それで、数人がヨール船で現場を見に行き、戻ったら、快適な場所は船舶の直面にあると報告した。それに、指導者は多数人に船からテントを取り出し、海岸に持って行くように命じた。その時にいくつか大砲や鉄砲も持って行かされた。それはすべて海岸に運ばれ、テントが張られ、強い防護が定められた。大砲に砲弾やブドウ弾が装填された。また、海岸でパンを焼いたり、ビスケットを乾かししたりする作業が行われた。

海岸に降りてから、ウスマイ人という島の住民は毎日我らの場所に大変大きな集団で訪ねており、昔から皆で共住していたかのように親切だった。だが、相手の言語を知らず、何も話しができなかった。我らがその海岸にいた期間ずっと彼らに何も強制や支払いもすることがなかったが、食物でもてなしてくれた。主にサラセン粟¹³⁾、芋、魚、さらにワインももらった。ワインも粟から作っているが、我らのロシアの麦ウォッカより全然悪くない。さらに我らのために料理を作るように調理師が連れとともに指定されていた。

ウスマイ人は皆一般的に偶像崇拝者であり、衣と上着¹⁴⁾は日本人が着るのと同じ物を持っているが、草から作っている。その草は木のように6アルシン¹⁵⁾まで生える。根で5ヴィエルシヨク¹⁶⁾あり、他にそれより大きいものも小さいものもある。葉は非常に幅広くて長く、長さは1アルシン以上、幅は半アルシン、またはそれより大きいものもある。その草の皮は大変薄く、薄い青色または他に白っぽいものもある。その皮を剥がし、乾し、砕け、糸に紡ぐ。糸を様々な染料で染め、様々な模様の生地を織る。その生地からすでに衣服を縫う、つまり上述した上着、しかも驚くほどその衣は絹ではないと誰も見分けできない。それ以外何も着ない。シャツもない。なぜなら、その場所も日本も冬がなく、どこでもかなり暖かいからであり、快適で健全な空気がある。彼らは靴の代わりに、ロシア人が鞣皮からラプティ¹⁷⁾を作成すると同じように草から編む履物がある。また、木製の板と縄から作った履物もある。帽子はないが、日本人のように草の帽子をかぶる。彼ら自体はまるで日本人であるように大変似ている。ただ、言語は特別で、文字も分かる。日本人と中国人¹⁸⁾と同様な字を上から下まで筆で書く。自分の羅針盤も地図も、それに航海用の本もある、中国人と日本人のように。それぞれは日本語も話せるし、日本人と貿易する。日本人はよく彼らを訪ね、船や品物積の商船で来る¹⁹⁾。我々の前に6人が日本の商品が積んでいた1隻でやって着た。彼らは日本人と違うところは、頭を剃り、後ろに整え、まとめることをせず、上にまとめ、日本人のように糊で塗り付け、一つの金の針で巻き、二つ目で突き刺す。この針は銀と銅のものもある。髭を剃らない人もおり、他は我々のタタール人²⁰⁾みたいに刈り込む。

あのウスマイ住民は畜牛を飼っており、牛、山羊、羊、それに馬も家禽：鶏、鶯、鶯鳥もいるし、犬も多くいる。我らは停泊していた湾内にも海にも船で様々な種類の魚を数多く漁しており、それぞれを塩漬にする。そのウスマイ人の建築は日本人のと同じで、住居の周りに何も要塞がない。自衛用の武器は何も携帯していない。自己流の斧とナイフだけある。食器は鑄鉄製である。

その島は、多くの非常に高い山からなっており、全部に様々な果樹がうっそうと茂って

いる。それは：オレンジ、シトロン、レモン、ミカン、ココナツ、およびヤシの実、他に我々に知られていない木もある。その島に森のブドウが数多く生えており、とても細かく、我々の赤豆より大きくない。それは熟するとカシスに見えるが、味は大変酸っぱい。その島で我々に知られていない不思議な果物が木に生えている。大きさは大きくないカボチャのようで、オレンジかレモンに見える。その表面に少々の塊があり、シベリアの松の実に似ているが、それより良くて大きい。その塊はそれぞれ自分の所から剥がれる。全部を剥いたら、真ん中に丸いリンゴみみたいなとても黄色い個体が残る。その味は甘くて美味しく、良いメロンを上回る。それにその味はメロンに近いので、健康に良さそうだ。しかも、栄養があるため、アンソン氏は、テニアン島で木が実るパンとその果物を名付けた。

ここにパイナップルも生えており、そのものは最高で最良の果物であり、それより良い農産物はあり得るはずがない。さらに、スイカ、生姜、シナモンとペッパーも十分ある。

その島の住民は、島で様々な野生動物がいると述べた。例えば：イノシシ、山羊、ヒョウ、他の野生。しかも我々は、毒性爬虫類、蛇、蠍なども見た。また害虫のバツタもけっこういる。それに、様々な石もあり、金剛石、宝石²¹⁾など、また真珠や真珠貝もある。我らもこれをいっぱい見つけた。すでに真珠が入っていなかったが、真珠はどこにあったか穴のように見えた。他に小さく大きい不思議な貝殻もあり、様々種類が少なくない。

その住民は、サラセン粟を蒔き、それは大変多くある。また芋の種も蒔き、それから実る根は、甘さと美味しさはどこにもないと考えなければならない。同じ住民は砂糖の草も蒔き、砂糖黍という。その中に糖の砂が実り、我らはそれを数多く取り、食べていた。それは高く、4アルシン以上もあり、太いところで葦より太い。それが熟したら、それを刈り取り、中から砂を取り出し、料理に使うし、ワインも作る。またタバコの葉も多く生えており、彼らはいつもそれを日本人と中国人と同じように小さい銅製パイプで吸う。このように我らは、その島で7月31日まで滞在した。

海に出港する前の29日に、そのウスマイ人は、我らに粟の樽と少々の芋とワインも渡してくれ、我らを送別した。その時に、我らの指導者からオランダ語の手紙が渡された。その内容は、我らが、そのウスマイ人の所に滞在していた間に皆に親しくしてくれ、何も恐怖を感じさせずに暮らすことができたことへ感謝の意を表した。我らはマカオに到着した後、そこのヨーロッパ人はウスマイ人について善良で手厚く迎え入れてくれる人たちだと述べ、そのためヨーロッパ人もウスマイ人を尊敬し、親切にする。

30日に指導者は、大砲や食料を海岸から船に運ぶように指令した、それで人が集まった。全部済んで、船に戻り、また翌日、つまり31日まで停泊していた。その31日に、ウスマイ人の住民は、数多く船で船舶にやって着た。まず、その長老がパンとワインを持って乗船し、私達と送別した。その後、我らの船舶を引き船で湾から海へ安全に出してくれた。それで私達は、彼らと別れた。

リュミンの記録の表題を見ると、ウスマイ人が住む島（以下奄美大島）は台湾とフィリピンの間に位置すると思ったように考えられる。彼も船をガリオット船、つまり大きくない海岸沿い航海に向いている船舶として述べる。7月19日に到来した陸の描写は、奄美大島の地形に整合する。ベニョフスキの記述によれば、南に向かっていたならば、奄美大島の東海岸と喜界島の間に通航したと考えられる。伊須湾の辺りにすでにいくつかの集落が

あったので、火が見えたことはあり得る。リュミンによると、夜中に上陸することはおそらく危険として判断され、夜明けまで沖で待っていた。ベニョフスキが『回想記』で描写した嵐、ヨール船の座礁、2人の溺死などは全く述べられていない²²⁾。

上陸する前に大島の島民は、自分の船で近寄り、乗船し、最初の友好的な交流があった。それにもかかわらず、ベニョフスキはテントを張る際に、船から大砲を降ろすことにした。前回の上陸地で、日本人の態度がいきなり悪化したことを体験した脱走者は、注意を払っていたことが推測できる。動機はなんであれ、リュミンの記述にあるテントや大砲はベニョフスキの『回想記』および日本の史料に整合する²³⁾。

ロシア人は島民の親切さに大変驚いた。毎日団体で、数多くでキャンプを訪ねたことが分かる。それに、到来者に対して遠慮を示すことがなく、リュミンに昔からお互いに慣れている印象を感じさせた。また、何も支払いを求めずに食料を与えた、と述べられている。個人的な推測であるが、そこに琉球人の漂流者に対する政策の特徴が読み取れると思う。昔から漁であれ、貿易であれ、海に頼った島民は海難事故の恐れと助け合いの重要性を認知していたと思える。中国、韓国、琉球、日本の中にすでに漂流者送還制度が存在していたことが分かる²⁴⁾。

その一方で、奄美の島民は、幕府に禁じられた海外貿易と異国交流に関わるができなかった。そこで、かなり武装していたロシア人との対立を避けながら食料と援助を与えることにより、早めに送別できるように協力したのだろう。その時にあげた食料の支払いを受け取った場合、販売行為として、違法の貿易を招く行動として見られたと思われる。滞在中および送別の時に米、芋、酒などの必需食品しか与えられていないが、カムチャツカで同じような送還制度を期待できなかった人々によって予想外の接遇に見えた、と推測できる。

リュミンの記録は、航海の事情が簡潔であるのに対して、上陸地の文化的、環境的な描写が数多くある。特に、著者が興味深く思ったのは、食料に関する言及が多いことである。大島の島民からもらった食料は、ベニョフスキの記述と似ている²⁵⁾。しかも、食材を渡されたばかりではなく、調理してくれるまでもてなされたという点で整合する²⁶⁾。また、お酒も飲まされたロシア人は、その質または度数を称賛した。リュミンがワインと言及する飲み物は、ベニョフスキにブランデーとして述べられている。

1850-55年の間に、名越左源太によってまとめられた『南島雑話』という、奄美大島の自然と文化を詳しく記述する民族誌を参照すれば、確かに大島では焼酎の蒸留が一般的だった。米も粟もその材料になり、サトウキビ汁と混ぜて飲む習慣もあったので、2人の記述は間違っていない。さらに名越によると、椎の実、ソテツの実、麦、薩摩芋からも焼酎が作られ、米麴にイチゴ、ユリの根、桑の実またはキクラゲも加えるレシピがあり、それぞれ美味しかったと評価した²⁷⁾。

次に、シベリア人のリュミンは、おそらく初めて出会った芭蕉を描写し、その「草」から衣類ができるまでの過程を概要した。『南島雑話』にも芭蕉の栽培と芭蕉布の製造が詳しく説明されている²⁸⁾。今でも沖縄の土産物として売られている芭蕉布は、確かに元の琉球島々に盛んであり、ベニョフスキが述べたようにほとんどの女性が織物に従事した²⁹⁾。リュミンは芭蕉布の質が絹と見分けできないと述べるが、名越によれば、大島では両方が製造されていた。

リュミンは大島やその住民を描写する時に、その前に見た日本人とその後に出会った中国人またはロシアに見られるものとよく比較した。草鞋、下駄、笠などの特徴的なものについて言及した。ウスマイ人は外見と服装は日本人と似ているが、髪の毛の結い方が違うと述べた。リュミンに紹介された簪の素材により、琉球で身分が示されたと思われることから、彼は色々な地位の島役人を見たことが分かる。また、言語学的な観察もある。大島の人々は漢字で書くが、話す言葉は日本語と異なると指摘されている。

リュミンの記録には、他の船員の観察も含まれているため、ベニョフスキの『回想記』によれば、イルクーツクで3年間日本語を勉強したポチャロフ（Дмитрий Бочаров）の意見に基づいた主張だという可能性がある³⁰⁾。リュミンは、大島の住民が自分の地図、航海記および羅針盤も持っているとして述べたことから、何か面会で到来者の出身と海路の問い合わせもあった、と推測できる。

到来者が大島で出会った日本人は、ベニョフスキと同様に商人として解釈されたことが分かる。『大島代官記』によれば、6月20日（旧暦）に漂着現場の伊須港へ到着した大島代官と附役の6人だった可能性が高い。それゆえ到来者は薩摩役人との接触は少なく、伊須村の住民と島役人と交流したことが分かる。ベニョフスキとリュミンの視点から見れば、この場合は日本人との短い面会があったが、島の支配者である印象を全く受けていないため、薩摩役人は島民の背景に止まっており、または『薩陽落穂集』という薩摩藩の雑書に読めるように、到来者のキャンプへ与人つまり島役人を派遣していた。到来者2人は、島民との接触については整合する。友好的なウスマイ人は武器を携帯しなかったし、遠慮せずに交流していた。『大島代官記』の記述に読み取れる住民の恐怖と村の警護は、全くヨーロッパ人に述べられていない。リュミンの記録の詳細を考慮すると、海岸の難民キャンプに閉じ込められた人ができるような観察に見えないため、『大島代官記』に言及されている警護の実践は疑わしく思える。

リュミンの記録には奄美大島の産業と文化だけではなく、農産、家畜、自然についての観察も数多くある。ロシア人に列挙されているほとんどの動植物は、奄美の自然を詳しく描写する『南島雑話』でも確認することができる。その内にリュミンに知られていなかった果物もある。謎の森ブドウはいくつか存在する野生ブドウ類³¹⁾、またはイイギリ科³²⁾と考えられる。さらに、シベリア松の実に比べられる不思議な果物は、外見はパイナップルまたはアダンに見えるが、パイナップルはまず木として言及するのは難しいし、ベニョフスキにもリュミンにも別に述べられている。

アダンは現在の沖縄では食物として認識されていないが、太平洋の島々ではパンノキとともに必需食品として知られている。そこで、リュミンはアンソン航海記に述べられているパンノキをアダンと勘違いしたのではないかと考えられる³³⁾。しかも、ある種類のアダンは、栄養のある健康食品として最新の研究にも確認されていることから、リュミンの判断は正確な予測である³⁴⁾。リュミンは本当に伊須の浜辺で食用のアダン種を味わったか、ベニョフスキのように想像力を働かせたか、判断しにくいところではあるが、2人ともココナツやパイナップルという疑わしい植物も述べている。

奄美の環境と気候では、このような熱帯植物の成長は不可能ではないが、一般的に、沖縄でパイナップル栽培が始めたのは、現代からであると考えられている。『南島雑話』には、この植物について記述されていない。そこで2人の観察を信用するとすれば、18世紀にす

で奄美大島でパイナップルやココヤシが知られていたことになる。しかも、その記述の類似性は考慮すべきところである。リュミンの記録は、3人の回想がまとめられたものであると同じように、『回想記』に見える奄美の自然は、ベニョフスキの観察ではなく、島を探検したスウェーデン人のヴィンブラット (Wynbladth) の報告であると述べられているため、大変似ているこの2つの記述は、実際に同じ起源に基づいているのではないかと考えられる。

更に驚くべきことは、リュミンが野生の動物の中に述べるヒョウの記述である。著者の空想に見えるが、実際に島民に教えられた話である、と明らかに指摘する。『南島雑話』に記述された伝承によると、島民は大島にチリモスあるいはザイモンと呼ばれる猫類の獣がいる、と信じられていた。たまにしか見られないが、子豚のように不浄で、死者の異物に宿るため、チリモスに触れた人は病気になって死ぬ、ということである³⁵⁾。この伝承を伝えられ、危険なチリモスの絵図などを見せられたリュミンは、ヒョウと連想したことがこのありそうにない記述の始まりだった、という可能性が考えられる。

大島から出航する到来者を見送った島民は、持ち帰りの食料を与え、湾外へ曳航してくれた。再び大島の住民の友好的な性格が強調されている。ロシア人がようやくたどり着いたマカオでは、ウスマイ人の名誉がよく知られていた、と述べられている。その際に、リュミンは一つの重要な点に言及する。ベニョフスキは、オランダ語で作成した感謝状を島民に手渡した。オランダ語を読める人がいなかったため、その書簡は長崎のオランダ商館に届けられた。奄美に出された4通の手紙の写本は、現在ハーグの国立古文書館に所蔵されている³⁶⁾。そのうち2つの内容は、リュミンが述べたように島民への感謝を表したが、残りの2つはオランダ商館に宛てられ、ロシア帝国の南方拡張を予測し、その後、日露関係および幕末の海防論に影響を及ぼした「ハン・ベンゴロの警告」として知られるようになった³⁷⁾。

おわりに

以上、11日の間、奄美大島に滞在したロシア人たちは、コミュニケーションの問題にもかかわらず、驚くほどその風土を観察し、その情報をロシアへ持って帰った。当時のヨーロッパで、日本および琉球に関する情報は、まだ一般的に制限されていたことに留意すべきである。リュミンの記録は、『回想記』よりも長い期間、公表されていなかった。それにもかかわらず、ある時に重要だと認識されるようになった。1821年にそれを暴露したベルフは、ロシア帝国の拡張論的なプロパガンダに訴えた。奄美大島を種子島と誤解したその著者は、その島について、リュミンが描くように物産の豊かな場所であり、必需品の乏しいシベリアにも近いことから、その地域を支えるのに不可欠であると述べた。また、日本はロシアに対して敵意を示すゆえに、ロシアはその地域を所有する権利があると主張した³⁸⁾。

リュミンの記録は、ベニョフスキに起こされた反乱と脱走がなければ、存在するはずがない。その題名が示すように、ベニョフスキとの冒険に関する記述で、カムチャツカの蜂起と脱獄囚の捜査中に作成された報告である。その後ヨーロッパでは、『回想記』が人気絶頂にあった時に、ロシアでは『回想記』にある空想の反証として、リュミン記録がベルフに与えられた。ベニョフスキの記述より正直に書かれているように読め、日付や旅の概要

は日本の史料とよく整合する。一方、ベニョフスキと同じ話を語る叙述も数多くある。それゆえ、『回想記』にある粉飾・誇張と真実を区別しようとする研究で、比較資料としてよく参照できるようになった。

しかし、リュミンの記録はベニョフスキの関係資料ばかりではなく、それ自体にも価値があると思う。その理由は、ベニョフスキやステパノフの記述と違って、航海の事情はあまり詳細ではないにもかかわらず、上陸地の文化、自然、農業、産業などの観察は詳しく記述されていることである。この単純な叙述は、初めて世界を旅する人の興味と驚嘆の念がよく読み取れる。それゆえ、リュミンの記録に読める日本および奄美大島に関する情報は、特に価値があると思われる。なぜなら、近世奄美のような日本の周辺地域を描写する外国の資料は少ないし、それを通して、琉球王国から薩摩藩への過渡期にあった大島の事情を、異なる外の視点から観察することができるからである。

ロシア人の視点から見れば、すでに150年以上薩摩藩の政治的な支配に入っていた奄美大島は、まだ文化的に琉球に近かったことが見えるし、日本人とウスマイ人の違いが明らかである。カムチャツカからの到来者によれば、奄美大島は善良で平和的な住民が住む豊かな楽園であった。日本の史料を考慮すれば、助けざるを得ない漂流者と、従わざるを得ない薩摩役人の間で動いていた伊須集落の村民は、自身の苦労もあったはずだが、それにもかかわらず、ベニョフスキおよびリュミンの感想によれば、琉球の有名な到来者へのもてなしが感じられた。

注

- 1) Beillevaire 2000.
- 2) Benyowsky 1790.
- 3) Benjowsky 1791: vol.2, pp.283-292.
- 4) ”Усмайцы”- Японцы (日本人)、Китайцы (中国人) との類似性から、ウスマイ人と訳する。
[Рюмин 1822: No.6, p.447.]
- 5) Вахрин 1990.
- 6) Рюмин 1822: No7, p.17.
- 7) Вахрин 1990.
- 8) Рюмин 1822: No.5-7.
- 9) Рюмин 1822: No.5, pp.375-376.
- 10) 現在、バシー海峡として知られている海域にあるバタン諸島を指摘する。
- 11) ”бусь”. бус/буса はおそらく大型の商船を指摘する。[Рюмин 1822: No.6, p.447.]
- 12) ”Бейспок”と言うが、ベニョフスキのことで間違いない。[Рюмин 1822: No.6, p.448.]
- 13) ”сарачинское пшено” 「サラセン粟」はここで米を指す。[Рюмин 1822: No.6, p.449.]
- 14) ”халаты и азямы”ハラトウとアジアムは、中央アジアの衣類である。[Рюмин 1822: No.6, p.449.]
- 15) 1 アルシン=0,71 メートル [Рюмин 1822: No.6, p.450.]
- 16) 1 ヴィエルシヨク=4,45 センチ [Рюмин 1822: No.6, p.450.]
- 17) ”лапти” [Рюмин 1822: No.6, p. 450.]
- 18) ”Китайцы”- 「契丹」に語源のある言葉は、現在も中国を示す。[Рюмин 1822: No.6, p.451.]

- 19) ”суднахъ, или бусахъ” [Рюмин 1822: No.6, p.451.]
- 20) ”наши Тагара”- リュミンはおそらく、総称的に東ヨーロッパからシベリアまで幅広く分布していた多様なタタール民族を言及する。特に、どの地域を示すのは明らかではない。[Рюмин 1822: No.6, p.451.]
- 21) ”яхоиты”- 紅玉と青玉を意味する合成語である。[Рюмин 1822: No.6, p.453.]
- 22) Benyowsky 1790: vol.1, pp.421-422.
- 23) 沼田・水口 1970: pp.268-269.
- 24) 豊見山和行 2000.
- 25) Benyowsky 1790: vol.2, p.9.
- 26) Benyowsky 1790: vol.2, p.5.
- 27) 『挿絵で見る「南島雑話」』1997 : pp.89-91.
- 28) 『南島雑話』平凡社版 1984 : pp.53-61.
- 29) Benyowsky 1790: vol.2, p.9.
- 30) Benyowsky 1790: vol.1, p.389.
- 31) テリハノブドウ、エビヅル [伊波 2004 : pp.192-194.]
- 32) 伊波 2004 : p.212.
- 33) Anson 1748: p.310.
- 34) Baba, et. al. 2016.
- 35) 『南島雑話』平凡社版 1984 : pp.42-44.
- 36) 沼田・水口 1970: pp.327-331.
- 37) 大熊 1969.
- 38) Берх 1821: pp.64-65.

参考文献

- 伊集院兼嘉（1771）『薩陽落穂集』鹿児島県立図書館所蔵、鹿児島。
- 伊波善勇、海洋博覧会記念公園管理財団（編）（2004）『沖縄植物図鑑』海洋博覧会記念公園管理財団、沖縄。
- 大熊良一（1969）「ベニョフスキーと北方海域の航海」『千島小笠原島史考』、しなの出版、東京。
- 『大島代官記』鹿児島県立図書館所蔵、鹿児島。
- 豊見山和行（2000）「一七世紀における琉球王国の対外関係―漂着民の処理問題を中心に」『十七世紀の日本と東アジア』山川出版社、東京。
- 名越左源太、國分直一・恵良 宏（編）（1984）『南島雑話』平凡社、東京。
- 名越佐源太、野尻純一・入佐一俊（編）、鹿児島県立大島高等学校南島雑話クラブ（訳）（1997）『挿絵で見る「南島雑話」』奄美文化財団、奄美。
- 沼田次郎・水口志計夫（編訳）（1970）『ベニョフスキー航海記』平凡社、東京。
- Anson, George; Walter, Richard (Ed.) (1748). *A voyage round the world, in the years MDCCXL, I, II, III, IV*. John and Paul Knapton, London.
- Baba, Shigeyuki; Chan, Hung Tuck; Kezuka, Mio; Inoue, Tomomi; Chan, Eric Wei Chiang (2016). *Artocarpus altilis and Pandanus tectorius: Two important fruits of Oceania with medicinal values.*

- Emirates Journal of Food and Agriculture*. Vol.28 (8), pp. 531-539, United Arab Emirates University, United Arab Emirates. (<https://www.ejfa.me/index.php/journal/article/view/1140>) (2017年11月19日アクセス)
- Вахрин, Сергей (1990). Экипаж мятежного галиота. *Вокруг света*. No.2-3. Февраль- март.1990. (<http://www.vokrugsveta.ru/vs/number/6445/>) (2017年11月19日アクセス)
- Beillevaire, Patrick (Ed.) (2000). *Ryūkyū studies to 1854: Western encounter part 1*. Curzon, Richmond; Edition Synapse, Tokyo.
- Benjowsky, Moritz August, Graf von; Ebeling C. D., Ebeling J. P. (Eds., Trans.)(1791). *Des Grafen Moritz August von Benjowsky Begebenheiten und Reisen, von ihm selbst beschrieben. Aus dem Englischen übersetzt von C. D. Ebeling, Professor am Gymnasium in Hamburg und Dr. J. P. Ebeling, Stadt un Landphysikus in Parchim. Mit des ersten Anmerkungen und Zusätzen wie auch einem Auszuge aus Hippolitus Stefanows russisch geschriebene Tagebuche über seine Reise von Kamtschatka nach Makao*. Benjamin Gottlieb Hoffmann, Hamburg.
- Benyowsky, Mauritius Augustus, Count de; Nicholson, William (Ed., Trans.)(1790). *Memoirs and Travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky, Magnate of the Kingdoms of Hungary and Poland, one of the Chiefs of the Confederation of Poland, etc. etc. Consisting of His Military Operations in Poland, His Exile into Kamchatka, His Escape and Voyage from that Peninsula Through the Northern Pacific Ocean, touching at Japan and Formosa, to Canton in China, with an Account of the French Settlement He was appointed to form upon the Island of Madagascar. Written by Himself. Translated from the Original Manuscript. In Two Volumes*. G. G. J. and J. Robinson, London. (『回想記』)
- Берх, Василий Николаевич (1821). Побег Графа Веньевского из Камчатки во Францию. *Сын Отечества*. No.27-28. Н. И. Греч, Санкт-Петербург.
- Рюмин, Иван (1822). Записки канцеляриста Рюмина о приключениях его с Бениовским. *Северный Архив*. No.5-6. Ф. В. Булгарин, Санкт-Петербург. (『リュミン記録』)